

株式会社インタラクティブィ 番組審議委員会議事録

1. 開催日時： 令和2年1月17日（木） 12時30分～14時00分

2. 開催場所： 株式会社ジュピターテレコム会議室 3階 Room1 会議室

3. 委員の出席：

委員総数： 7名

出席委員数： 7名

出席委員の氏名：

（敬称略、五十音順）

植田 益朗、音 好宏、片山 哲郎、砂川 浩慶、村上 憲一、中川 幸美、吉岡 忍

放送事業者側出席者：

株式会社インタラクティブィ

代表取締役社長 長谷 一郎

ジュピターエンタテインメント株式会社 <女性チャンネル ♪LaLaTV>

編成・制作部長 秋元 美加

編成・制作部 副部長 伊妻 颯子

プロモーション部アシスタントマネージャー 廣田 結子

エアンドイーネットワークスジャパン合同会社 <ヒストリーチャンネル 日本・世界の歴史&エンタメ>

ゼネラルマネージャー ジョン・フラナガン

制作部プロデューサー 福井 靖典

事務局：

株式会社ジュピターテレコム

DTH 営業部 高木 明夫、野々口隆介、細江央輝、森井 健策、田口 聖美

4. 議題

株式会社インタラクティブィで放送する6チャンネルの内、「女性チャンネル ♪LaLaTV」、「ヒストリーチャンネル 日本・世界の歴史&エンタメ」の番組内容、編成内容について。

5. 審議内容

- ① 「ヒストリーチャンネル 日本・世界の歴史&エンタメ」の編成およびオリジナル番組『musicBean#001 般若 ドキュメンタリー』について、各委員より以下のような意見・質問がなされた。

- RAP に対してネガティブなイメージはなかったが、般若の人間像がしっかりと描けていた。
- 般若本人が素朴な人で、驚きもあり、面白かった。
- 構成上、最後に武道館のシーンを持ってきたところも良く、工夫されていた。
- ラッパーはよく社会のいろんな問題に対して怒りをぶちまけていることが多いが、番組は最後に「家族」の話になってしまい、「社会の問題」への意識の低さを感じ、違和感を覚えた。
- 「3. 11」のパートで、「絆」をテーマに歌っていることは良かったが、本来はその先の展開が見たい。これは制作者の問題ではないかと思う。
- 制作者と出演者の意思疎通が薄かったのではないか。
- チャンネル加入者は知的好奇心が旺盛で、年齢層が高く、今回のテーマではギャップがあるのではないか？ヒストリーチャンネルが「ラッパー」を扱う意図が知りたい。また日本のラッパーをなぜ出しているのか興味深い。
- 「三軒茶屋」の町の印象は良くなく映し出されており、番組は最後に「家族」の話になってしまい、「三軒茶屋」の街についてはよくわからないままになってしまった。オープニングで強調している割に、絡みがない。
- 番組内で「ラップ」の歴史も捉えてほしかった。
- ヒューマンドキュメンタリーとして構成するなら、まず、「般若」の凄さを表現し紐解いていくのだが、番組冒頭は「三軒茶屋」から始まっており、それが番組では大して触れていなかったのがよくわからなかった。
- 構成は良くも悪くも、ユニークで、不可解さが興味深かった。
- 武道館をラストシーンとしてメインにもっていくのは普通だが、あまり武道館のコンサートにまでこぎつけたという「悲願」に結び付けている印象がなく、こだわりが薄かった。
- 人間関係を家系図に紐づけて用いられていたが、イマイチその意図がよくわからなかった。
- 番組で話をしている人のバックグラウンドがもっと知りたかった。
- 般若が真面目な青年であることは良く分かったが、自分の生い立ちと重ねて、最後のシーンで息子をステージに乗せたシーンは、普通で泣けなかった。
- 制作者として誰に見せたいのか？般若を知っている人なのか、知らない人なのか？知らない人からすると導入が良くなく、つかみがなかった。
- 武道館への思いに共感できなかった。
- ドキュメンタリーを制作する際には、つかみを見せて、興味を持たせてから導入するが、この番組はなんとなく般若が「撮影 OK。」と言ったところだけを編集しており、制作側で戦っていない気がした。
- 般若の魅力は伝わった。
- 番組尺が長いなという印象はあったが、全体の印象としては面白かった。
- 番組尺の割には、情報量が少なく、印象に残るところが少なかった。

- －出演者が、渡辺謙に似ているなど感じ、役者として存在感のあるキャラクターだと思った。
- －17歳から41歳の時間軸で、様々な経験から歴史としてのポイントがあったかと思うが、もっと般若のバックボーンをもっと突っ込んでほしかった。出演者の言いたくないことを言わせることが、ドキュメンタリー番組の醍醐味だと思うが、そういう部分が足りなかった。
- －「HIPHOP」の歴史や、その中での般若の位置づけなどがあれば、より背景を知ることができ、普通の視聴者が見ても良かったと思う。
- －般若ファンが絶対買わずにいられない要素が、もう少し必要だったかと思う。
- －ヒストリーチャンネルのチャレンジとしては評価をする。
- －（番組を見ていて）「般若って誰？」「視聴者は誰？」「途中出てくるルミって誰？」などと疑問に思うことが多く、番組の構成展開についていけない部分が多く、平面的だった。
- －3.11震災ライブの映像を冒頭に使用するだけでも、もっと世界感に入りやすかったのではないかな？
- －前半の30分は冗漫で勘弁という印象。
- －般若の目力に惹きつけられた。その魅力が番組を支えているようにも思った。
- －90分尺があらかじめ決まっているから、冒頭が冗漫になったのではないかな？
- －ヒエラルキーの最下層にある若者の状態を入れても良かったのではないかな？
- －般若とのやりとり（番組制作の裏面）があってもよかった。
- －テレビ側からすればヒストリー（歴史）だが、彼の父の背景があればまた違う。
- －入りにくい導入だった。
- －「貧困」、「不良」などを描きたいがために読み取りにくくしているようにも思った。
- －長渕剛の話から変わってきていて、最終的に「家族」の話になり、導入からの展開が違ってしまった。
- －最後に「家族」にまとまった時に、なんか違うと感じた。
- －構成をもっと変えて、インパクトつけた方がいいと思う。
- －番組コンセプトに可能性を感じる。
- －彼の詩をもっと取り込んでもよかったのかもしれない。
- －「般若」を番組1本目に通した企画の原動力を番組冒頭にもってきても良かった。

<事業者回答>

- －音楽専門チャンネルとの差別化として、ドキュメンタリー＋ライブという2本立てとし、出演者に1年間密着し、出演者の人間性を知ってもらった上でライブを楽しんでもらうことを狙った。
- －現状の視聴者層とはターゲットに差異はあるが、4Kの制作や、劇場公開、PKG展開などの広がりを含め、トライアルとして取り組んだ。
- －今回のテーマは「音楽」だったが、今後はプロデューサー等、40～50代のターゲットにあった選定も今後は考えている。
- －選定理由としては、ターゲットを変えたかったこと。ラップも変わってきており、般若自身が業界でも他とは違う存在だった。
- －社会のいじめ、格差ということを経験していることを伝えたかったが、そういった部分の深堀は行っていなかった。
- －今までにないアプローチをして攻めたが、客観的な意見をいただけた。

- －出演者の般若さんは多くを話さない人で捉えづらい部分もあったが、経験として今後活かせるどころが多かった。
- －番組スタッフとの連携、深堀を今後も行っていく。
- －番組としては、あえて一般的ではないアプローチを試みた。
- －YouTube など SNS と比べてテレビの優位性は、長期間密着し、作り手の意思を反映していくことができる。そういった点が非常に大事で、客観性を大切に今後も展開していきたい。

② 「女性チャンネル♪LaLaTV」の編成およびオリジナル番組『LaLaTV♪Dear WOMAN きりひらく女#14 シンガーソングライター NakamuraEmi』について、各委員より以下のような意見・質問がなされた。

- －今回の番組については番組タイトルにある「きりひらく女」といったコンセプト重視よりも啓蒙活動の一環としての番組であると理解した。
- －中村さんの詩がとてもよかったが、彼女の詩の創作する部分の深堀があってもよかった。
- －画（シーン）を決めて、音楽作って、詩を作るといった過程の中の、苦しみなどがほしかった。
- －また本人はとても小柄で、その小柄な感じの画（シーン）があれば、もっと良かったかもしれない
- －番組を見て、「優しさ」を得ることができた。
- －見やすいと感じた。
- －「児童虐待」というテーマについては、切実な社会問題であり、テレビ局として取り組むことは大賛成。
- －番組としてバランスがしっくりこなかった。タイトルと中村さんという人柄で、なにを“きりひらいた”のかが、見えづらいものだった。
- －彼女にとって、何のための楽曲なのか、少しわかりづらかった。
- －「きりひらく女」と、彼女に違和感があり、この番組はタイアップだったのか？という先入観が見えてしまう。
- －番組の要素がばらばらで結び付かなかった。
- －「児童虐待」という問題にどこまでつっこむのが良いか難しい。いろいろな事情もあつてか、実際の事件をフォーカスすることはなかったが、いろいろな画（シーン）を歌に重ねた方が良いと思った。
- －テレビ局の制作する裏側は視聴者に関係ないが、「きりひらく女」のコンセプトが見えなかった。
- －中途半端に、プロモーションビデオを見せられた印象になった。
- －中村さんの人物背景がわからなかった。
- －彼女が「児童虐待」について調べているシーンがあつたがそれだけになっていて、彼女の情熱を表現する方法があつてもよかったのでは？
- －製作者としては、番組コンセプトを通すべき。
- －ヒューマンドキュメンタリーという番組を会議で企画として通した際の制作側の原動力（こだわりやメッセージ）があつたはずで、それを番組の冒頭に見せるというのが普通だがなかった。
- －中村さんは何がすごくて、「きりひらく女」として通したのか、こだわりとメッセージが見えない。
- －視聴者に不親切。ある意味、構成としてはユニーク。
- －中村さんの他の曲を紹介されるパートがあつたが、もうちょっと詳しくてもよかったのでは？
- －「児童虐待」について2か所訪問しているが、必要だったか？それよりも、彼女の保育士の時のエピソードが大事だったのでは？彼女の経験（エピソード）が表れる方が説得力ある。
- －番組タイトル「きりひらく女」とのギャップはあるが、そこがユニークであつたが、描かれ切れず残念だった。
- －中村さんの曲のすばらしさ、その原動力がもっと知りたかった。
- －相対的に評価高い。
- －最後にフルコーラスを入れたところが良かった。尺が短い中での構成としてはよかった。

- 公的な施設に取材に行くシーンは表面的で付け焼刃だが、一般人ではないミュージシャンが、わざわざああいうところに行くということが良かったのかもしれない。地道な活動に足を運ぶことが大事だったと思う。
- 彼女の元保育士という経験が、詩の優しさに出たと思うが、そのエピソードが語られていると良かったのではないかな？
- コンパクトな中で、最後の歌で印象に残り、よかった。
- テーマ設定としてのギャップはあったが、単発としての番組としてはよかった。
- 彼女はまっすぐで裏もなく、制作側としては困る人だったと思う、よく作ったなと思う。
- 公的施設に行って役に立つかはわからないが、彼女がそこに行ってどう考えたのかを描くのが大事。
- 全体にフラットな印象があり、番組制作者の問題と思う。
- 彼女に座らせて話をしているが、彼女のようなまっすぐな人は静止画のように見える。
番組で動きがあるのは挨拶と歌のみ。撮り方がパターン化している
- ナレーションに「日々と戦いながら・・・」とあったが、それはどこにかかっているのか？
自分の道を切り開こうとしている女性なのか、ドキュメンタリー番組を制作している制作者か。
番組として「戦っている人」を撮るのは簡単。戦っていない人を制作者が戦かって撮ることが大事。
- 製作者と一緒に戦って作ろうよという姿勢があるだけでこの番組は違ったと思う。
- いい歌を作っている中村さんの日常を撮ることが、必要だった。どうやって日常が詩になったのか、その過程を制作者が戦って描くべき。
- 何も残らない。
- 現場の人が、「きりひらく女」と、「日々と戦っている」「自分の戦い」と、LaLaTV が啓蒙するミッションを1つにすることは大変だが、それをナレーションで語っているので、ナレーションが過多になっている。これはミッションを出した側に問題がある。
- 中村さんが、楽曲で何を楽しんで、何を歌ったのかがないので、ナレーションに頼ってしまい、中村さんの普段の魅力がなくなった。
- 女性を応援する番組としての整理が大事。

<事業者回答>

- ご指摘の箇所についてのコメントは納得感のあるものでした。今後の番組制作の参考にさせていただきます。

以上